

良寛の書に魅せられる

藤原 道夫

我が家の床の間に時々良寛の書（複製）が飾られる。これを得たきっかけは、良寛が最晩年を過ごした和島村島崎（現長岡市島崎）の木村家を訪ね、座敷に展示されている真筆の書を見る機会があったこと。良寛は存命のうちから能書家として知られ、独特な字体の書を残した。人気があったせいで贋作も多く出回ったようだ。

最初は新潟に赴任していた時、土地のことに詳しい研究生が案内してくれた。未だ良寛について知ることが少ない時のこと。3年後に遠来の大学教授を案内し、感謝された。その頃には良寛について多少とも知るようになっていた。2回とも木村家先代当主が説明に当たっていた。白髪の鬢髻とした方で、めがね奥で眼光をきらりとさせながらここにある書は全て真筆であることを強調し、さらに「書は人なり」といい良寛の書には研鑽を重ねた凄みが顕れており、贋作はそれを欠くと言っていた。それから凡そ10年後、東京から訪ねた。当主が若い世代に替わり、説明も特になし。この時数点の複製品（巧芸社による）を求めた。

それらのうち和歌が書いてある一幅を家内が大層気に入って、専門家に表装を依頼して掛け軸にしつらえて貰い、茶事の折に使っていた。漢字で書いてある和歌を通常通りに記す。

わが宿を訪ねて来ませあしびきの 山のもみじを手折りがてらに

初めのわに和を当てている。これが絶妙な筆さばきだ。たには当か當を当て、二行目右上と終わりから二行目下にやや濃く書かれている。すべて崩し字で流れるような筆遣い。最後の行は良寛書と3字のはずだが、もっとあるかのよう。遊び心が込められているか。

良寛の書については、かつてNHKの番組「美の壺」で取り上げられた。見たのは確かだが内容はよく覚えていない。Netで調べると、何と放映された全文と書の例が掲載されているではないか。鑑賞の壺は次のよう。

1. すべてをかなのように書く
2. ずれとゆれを楽しむ
3. 弱さに強さがある

これらを参考にして掛け軸を見る。良寛の書風に引き込まれ、飽きることなく眺め入った。